卒業生紹介

辞書を編み、文化を紡ぐ　～ようこそ、古文の世界へ～

Fujikura Hisako
藤倉 尚子

株式会社旺文社　ブック事業部
国漢辞書グループ

2004年お茶の水女子大学文教育学部言語文化学科日本語・日本文学コース卒業。2006年お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士前期課程言語文化専攻日本語日本文学コース修了。2006年旺文社に入社以来、古語・国語・漢和辞典などの編集に携わっている。

辞書の編集者と言えば、この春の話題作『舟を編む』（原作：三浦しをん）を思い浮かべる人も多いだろう。15年をかけて一冊の辞書をつくる話だが、実際、新刊なら約10年、改訂版でも3年前後を要するとされるのが辞書の世界である。今回は、辞書の世界で日々言葉を「編む」仕事に携わる卒業生に登場いただいた。

古文の世界に魅せられて

「高校生の時から私の夢は『堤中納言物語』の作者を知ることでした」

古文の授業が楽しくて仕方がなかったという彼女を魅了したのが平安時代後期の短編物語集『堤中納言物語』だった。編者もわからず、一編を除いては作者も不詳のこの作品を研究し、誰が書き、誰が編纂したのかをつきとめたかったのだという。

卒業論文でもこの文献に取り組んだ。しかし、深く踏みこんで初めてわかったのは、新しい文献や資料が発見されない限り、作者も編者も特定することはほぼ不可能だということだった。『堤中納言物語』を生涯の研究テーマにしたいと考えていただけに、この結論にはさすがにショックを受けたものの、自分の進路をあらためて考えるきっかけにもなったようだ。

「高校から大学まで女子校で 10 年間、とても大切に守られた環境でぬくぬくと生きてきたなと思い始めました。特に私のやっている古文は、理系の学問のようにダイレクトに社会に役立つというタイプのものとは少々異なります。好きな古文に関わりながらも、もう少し社会とつながりを持ちたいという気持ちが芽生え始めました」

アカデミックな世界で生きるのも魅力だが、そこだけにとどまらないで世界を拡げてみたくなった藤倉さんは、博士後期課程に進まずに就職するという道を選んだ。目指したのは出版社。古文と関わりのある出版社が非常に少ない状況だったが、教育出版社の旺文社と巡りあった。高校時代に愛用した古語辞典の版元でもあったことから不思議な縁を感じたという。そして入社後、最初の仕事は古語辞典。まさに願ってもない仕事だった。

古の文化を語り継ぐために

それからは辞書を読みながら、間違いがないか調べていく日々が続いた。まだ入社したばかり、なにも知らないままに、自分が学んできたことを頼りにしながら辞書を丸々一冊、2 回読み通した。その後も立て続けに計 3 冊の古語辞典の編集に携わった。

なかでもいちばん気に入っているのが、用例の訳を確認する仕事だ。用例は、常に原文にまで遡り原点を探って訳を施す。それには、非常に手間暇がかかり、根気と努力が必要だ。しかし、根っからの古文好きに加え、大学時代にことばの意味を調べるときは辞書や注釈に頼らず、常に膨大な用例を自分で調べて類推し、自分で訳をつけることを徹底され、それが基本のスタイルとして確立していた藤倉さんにはある意味、馴染み深くてなにより楽しい作業となった。

「旺文社の辞書では“ん”の項の最後の頁に、関わった全員の名前が掲載されるんです。初めて載ったときは心から感激しました」という藤倉さん。延々と机に向かって文字を追う日々は、腰も痛くなるし目も疲れるが、その達成感は何物にも代え難かった。

一方で思うのは、辞書の責任だ。「正しい」ことが当然とされる辞書は、少しでも不確かなことがあると多くの読者から指摘する便りが押し寄せる。それは、裏を返せばそれだけ皆が辞書を信頼しているということでもある。その現実を目の当たりにしながら、日々、辞書の重さを実感している。

最近はさらに、「日本の古の文化を次の世代に伝えること」を自らの生涯のテーマだと考え始めた。古文に興味を持つ高校生がますます少なくなっている今、古文と最初で最後の出会いとなる高校時代にその面白さに気づかずに通り過ぎる人があまりにも多いと感じているからだ。

「現代とはまったく違う文化の中に、現代の私たちにも通じる“心”があるということを知ってほしい」と藤倉さん。その一助となるものを実現することが今の目標となっている。

文責：広報チーム

わたしのオフタイム

昨年から、英会話スクールに通っている。なかには日本文化に興味のある先生もいて、古文について英語でおしゃべりできるのはうれしく、楽しい時間だ。

入社当初から習っている着物の着付けは、もう今では一人できちんと着られるようになった。次は、習字に挑戦したいと思っている。